

鹿児島県総合教育センター

令和元年度長期研修研究報告書

研 究 主 題

不登校の未然防止を目指した取組
－自己有用感を高める三つの「いいね！」－

霧島市立舞鶴中学校
教諭 高木 秀和

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想	
1	研究のねらい	1
2	研究の仮説	2
3	研究の計画	2
III	研究の実際	
1	研究主題についての基本的な考え方	2
(1)	不登校の未然防止について	2
(2)	自己有用感を高める三つの「いいね！」について	3
2	生徒の実態について	4
(1)	実態調査の概要	4
(2)	実態調査の結果と考察	4
3	本研究で目指す生徒の姿と授業の在り方	6
4	自己有用感を高める三つの「いいね！」の活動の工夫	6
(1)	「自己有用感を高めるための取組」年間指導計画について	6
(2)	ワークシートの工夫	8
(3)	話し合い活動の工夫	8
(4)	学校生活における「自己有用感を高める場面（例）」について	9
5	検証授業Ⅰの実際と考察	11
(1)	検証の視点	11
(2)	授業の実際	11
(3)	成果と課題	14
(4)	検証授業Ⅱに向けて	16
6	検証授業Ⅱの実際と考察	17
(1)	ねらい	17
(2)	検証の視点	17
(3)	指導計画	17
(4)	授業の実際	18
(5)	成果と課題	21
(6)	生徒の学校回避感情の変容	25
IV	研究のまとめ	
1	研究の成果	25
2	今後の課題	25

※ 引用文献・参考文献

I 研究主題設定の理由

現在の中学生在が成人して社会で活躍する頃には、少子高齢化が更に進み、生産年齢人口の減少や絶え間ない技術革新等により、予測が困難な時代になると言われている。このような時代にあって、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことが求められている。また、第3期教育振興基本計画^{*1)}の方針には、「夢と志をもち、可能性に挑戦するために必要となる力を育成する。」とあり、豊かな心の育成につながる子供たちの自己肯定感（自己肯定感は自尊感情と自己有用感からなる。）の育成が求められている。尾木(2011)^{*2)}は、「不登校という状況が継続することは、その子供の進路や社会的自立のために決して望ましいことではない。」としており、不登校対策は学校の重要な責務であると考ええる。

鹿児島県教育委員会^{*3)}の調査結果によると、平成30年度は前年度に比べ、全ての校種において不登校児童生徒数が増加している。不登校児童生徒の在籍率は、小学校0.47%、中学校3.48%、高等学校2.47%である。全ての校種とも新たな不登校数が増えており、小・中学校では、学年が上がるにつれて、不登校数が増えている。平成30年度の本校の不登校生徒の在籍率は2.94%で、その中の半分以上が新たな不登校生徒であり、不登校対策は本校の喫緊の課題である。

本校の学校教育目標は、「自ら学び、豊かな心とやる気をもって行動する生徒を育成する。」であり、重点目標は、「基本的な生活習慣を確立し、いじめや不登校を減らす積極的な生徒指導に努める。」である。学校教育目標等を達成するために、学校の教育活動全体を通して、生徒の最も身近な所属場所である学級や学年において、自分は他者から認められており、安心して生活できる居場所があることを感じさせる必要がある。また、他者と関わる中で、達成感を味わわせ、自己有用感を高める必要がある。

これまでに学級担任として、不登校・不登校傾向の生徒に対して、解決に向けた糸口を探ってきたが、一度不登校になると改善を図ることが難しかった。このような経験から、不登校を起こさない、つまり未然防止を目指した取組も重要であると考えようになった。学校で自分の居場所があると実感させることができれば、学校回避感情^{*4)}が低くなり、不登校生徒数の減少につながると考える。併せて、集団生活を基本とする学校において、よりよい人間関係の構築が重要である。他者との関わりや集団の中で、自分が価値ある存在であることを、自分で認識する感覚である自己有用感を高めることができれば、不登校になりにくくなるのではないかと考えた。

そこで、本研究では、不登校の未然防止を目指して、生徒の自己有用感が高まるとはどのような状態であるか、生徒の自己有用感を高める具体的な活動等を明らかにする。その上で、生徒の自己有用感を高めるための検証授業等を実践し、活動前後の実態調査を実施することで、活動の検証を図る。また、生徒の自己有用感を高めるための年間指導計画を作成し、計画的に取り組むことにより、学校は魅力ある場となり、不登校の未然防止につながると考え、本研究主題を設定した。

II 研究の構想

1 研究のねらい

- (1) 基礎研究として、不登校の未然防止を目指した取組について、先行研究等から明確にする。
- (2) 自己有用感が高まるとは具体的にどのような状態であるか、また、自己有用感を高めるためにどのような活動等の工夫が必要であるかを明確にする。
- (3) 自己有用感を高めるための活動に焦点を当てた検証授業等を実践し、活動前後の実態調査を実施することで、活動の検証を図る。
- (4) 自己有用感を高める視点から、学級活動や学校行事等の在り方について明確にし、指導方法・年間指導計画を構築する。

*1) 文部科学省 『第3期教育振興基本計画』 平成30年6月

*2) 尾木和英・有村久春・嶋崎政男 『図でわかりやすく解説 生徒指導提要进行を理解する実践する』 2011年 学事出版

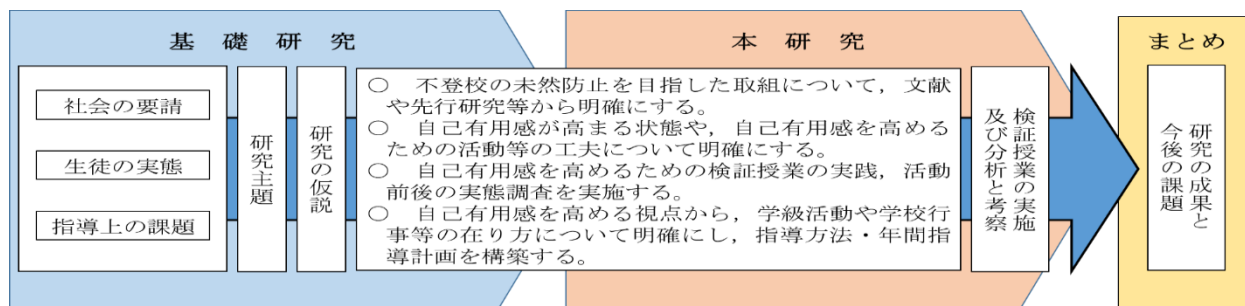
*3) 鹿児島県教育委員会 『平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果（鹿児島県公立学校）』 令和元年10月

*4) 「病気でもないのに、普段、学校に行きにくい、または行きたくない。」という感情

2 研究の仮説

学校において、教師が生徒の自己有用感を高めるための活動等の工夫を継続することによって、生徒の学校回避感情は低くなり、不登校の未然防止につながるのではないかと。

3 研究の計画



Ⅲ 研究の実際

1 研究主題についての基本的な考え方

(1) 不登校の未然防止について

ア 不登校の予防とは

国立教育政策研究所によると、不登校の予防には、「未然防止」と「初期対応」がある（表1）。

未然防止とは、教育的な予防の発想の働き掛けであり、特定の生徒を想定する

のではなく、全ての生徒を対象に行う。具体的な方法は、観察や実態調査による生徒理解、授業や学校行事等の工夫や改善による全体指導をし、学校を休みたいと思わせないことが重要である。

初期対応とは、治療的な予防であり、休みそうな生徒、あるいは休み始めた生徒を対象に行う。具体的な方法は、早期発見・早期対応による個別指導である。

学校に期待されていることは、健全な社会人になる上で必要な基礎的・基本的な資質・能力を育成すること、それを生かして自己実現に向かおうとする意欲・態度を育成することである。生徒にとって、不登校の状態が継続することにより、学校は基礎的・基本的な資質・能力や意欲・態度を十分に育成できないことになる。よって、教師は、全ての生徒を対象に、授業や学校行事等の工夫や改善を通して、未然防止の視点で教育活動を実践することが重要であると考えられる。

イ 不登校の新規数を増やさない取組について

国立教育政策研究所^{*5)}は、学年別不登校数の内訳を千人率で表している（図1）。「不登校数」は、学年が上がるごとに増加している。これを、前年度から不登校であった「継続数」と、今年度新たに不登校になった「新規数」に分けると、不登校児童生徒の一部に

表1 不登校の予防の観点

観 点	未然防止 (教育的な予防)	初期対応 (治療的な予防)
対 象	・ 全ての生徒	・ 休みそうな生徒 ・ 休み始めた生徒
具体的 な方法	・ 生徒理解(実態調査等) ・ 授業や学校行事等の工夫や改善による全体指導	・ 早期発見・早期対応による個別指導

※ 国立教育政策研究所「生徒指導リーフ leaf.14 不登校の予防」を基に作成
太線部が本研究の観点、対象等になる。

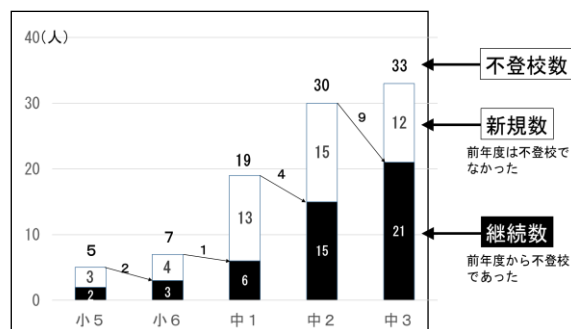


図1 学年別不登校数の内訳（千人率）

出所：国立教育政策研究所「生徒指導リーフ Leaf. 22 不登校の数を『継続数』と『新規数』とで考える」

*5) 国立教育政策研究所 『生徒指導リーフ Leaf. 22 不登校の数を「継続数」と「新規数」とで考える』 平成30年

は改善が見られるものの、前年度不登校ではなかった児童生徒が新たに不登校になる状況がある。よって、新たな不登校児童生徒を生まないことが、不登校児童生徒数の減少につながり、不登校の未然防止になると考える。教師は、学校で学ぶことやよりよい人間関係を構築することにより、学校には自分の居場所があると全ての生徒に実感させる取組を行わなければならないと考える。そこで、自己有用感に着目し、研究を進めることにした。

(2) 自己有用感を高める三つの「いいね！」について

ア 自己有用感とは

自己有用感とは、他者や集団に対して貢献したり、互いに認め合ったりすることにより、自分の存在を価値あるものとして受け止める感覚であると捉えた。

栃木県総合教育センター^{*6)}の先行研究から、自己有用感とは存在感、承認、貢献の三要素から構成されており、特に、存在感は中心的な構成要素であることが分かった。併せて、生徒と学級、教師、家庭の関係性も自己有用感を獲得するために重要なものである(図2)。自己有用感とは、三要素と関係性が相互に関連し合って高まるものとする。

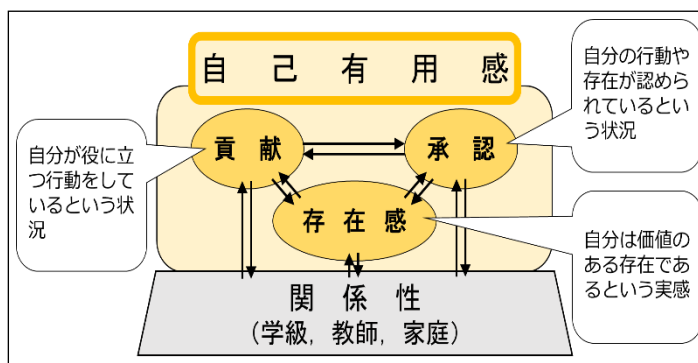


図2 自己有用感を構成する三つの要素と関係性
栃木県総合教育センターの先行研究を基に作成

イ 三つの「いいね！」とは

三つの「いいね！」とは、自己有用感を高めるために、存在感、承認、貢献の三要素に関連する以下のような状況が見られたときに、「いいね！」と認め、伝える姿とした。

- ◇ 存在感・・・自分の意見や考えを发表或し、集団の役に立ったりする。
- ◇ 承認・・・他者のよい行動に気づき、褒め、認める声掛けをする。
- ◇ 貢献・・・当番の仕事等に対して、責任を果たしたり、手伝ったりする。

自己有用感を高めるには、存在感、承認、貢献の状況が見られたときに、他者を認め、伝える必要があると考える。具体的には、失敗体験も含めて、目標に向かいやり遂げさせる機会を与える。また、他者に貢献して達成感を味わわせたり、他者の行動を承認したりすることにより、存在感を高めることが大切である。学級における関係性の中で、貢献や承認を繰り返すことにより、存在感が高まり、自己有用感も高まると考える

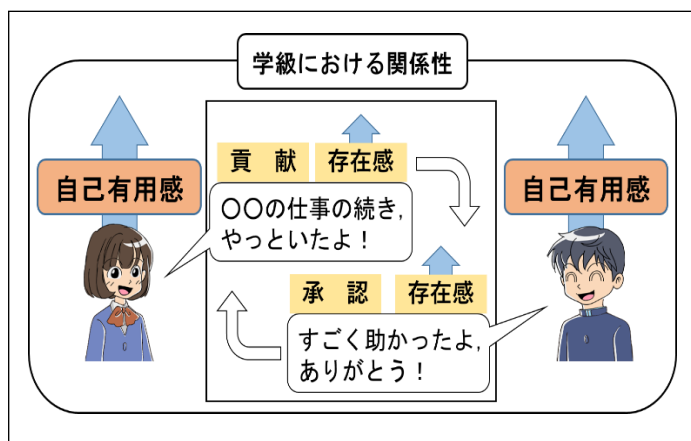


図3 学級における関係性で自己有用感が高まるイメージ

(図3)。教師は生徒に三つの「いいね！」を意識させながら、生徒と関わっていくことが重要である。

*6) 栃木県総合教育センター 『高めよう！自己有用感』 平成25年

2 生徒の実態について

(1) 実態調査の概要

目 的	生徒の「自己有用感」,「学校回避感情」,「舞中スタイル（本校の話合いの基本）」の活用状況について,「普段,思っていることに関するアンケート」を実施した。なお,「自己有用感」を測定するためのアンケート項目は,「自己有用感尺度」*6)（栃木県総合教育センター）を利用した。 生徒の学校適応感を測定するために,「学校楽しいーと」*7)（鹿児島県総合教育センター）を実施した。
対 象	霧島市立舞鶴中学校 2 年 4 組 37 人（男子 18 人, 女子 19 人）
実施日	令和元年 6 月 14 日（金）
方 法	選択肢による質問紙法

(2) 実態調査の結果と考察

ア 存在感について

(ア) 結果

存在感に関する三つの質問に対して,「とてもあてはまる」,「あてはまる」と回答した割合は,いずれも50%未満である。つまり,学級の半分以上の生徒は「学級の人の役に立っている」,「学級の重要な一員だと思う」,「学級の人から信頼されていると思う。」と感じることができていないということが分かる（図4）。

(イ) 考察

生徒の最も身近な所属場所である学級において,自己有用感を高めるために,個人や集団の目標を設定し,その目標達成に向けて努力する大切さを味わわせる必要がある。そのような場面を設定し,他者と意見を交換しながら協働することによって,生徒に学級における存在感を感じさせる必要がある。

イ 承認について

(ア) 結果

承認に関する二つの質問に対して,「とてもあてはまる」,「あてはまる」と回答した割合は,どちらも50%を超えている。学級の半分以上の生徒は,学級の人から「ありがとう」と言われたり,褒められたりしていると感じていることが分かる（図5）。

(イ) 考察

授業等において,生徒が学級の人から承認されていると感じさせるために,「いいね!」と互いに認め合い,伝え合う場面の設定が必要である。

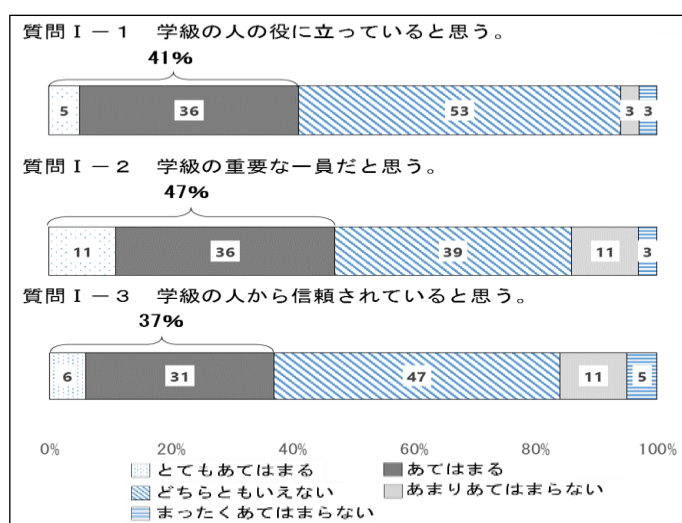


図4 存在感について

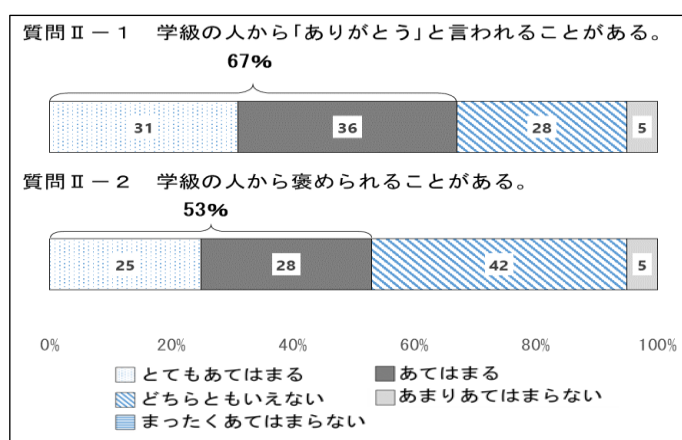


図5 承認について

*7) 鹿児島県総合教育センター <http://www.edu.pref.kagoshima.jp/curriculum/seisi/newhikakuyou/top.html>

ウ 貢献について

(ア) 結果

貢献に関する「学級の人の手伝いをすることがある。」という質問に対して、「とてもあてはまる」、「あてはまる」と回答した割合は69%である。「学級の人のために何かをしたい。」という行動面での意識が高いことが分かる。

一方、「学級の人が納得する意見を言うことがある。」という質問に対して、「とてもあてはまる」、「あてはまる」と回答した割合は36%である。自分の意見に自信がないと言える（図6）。

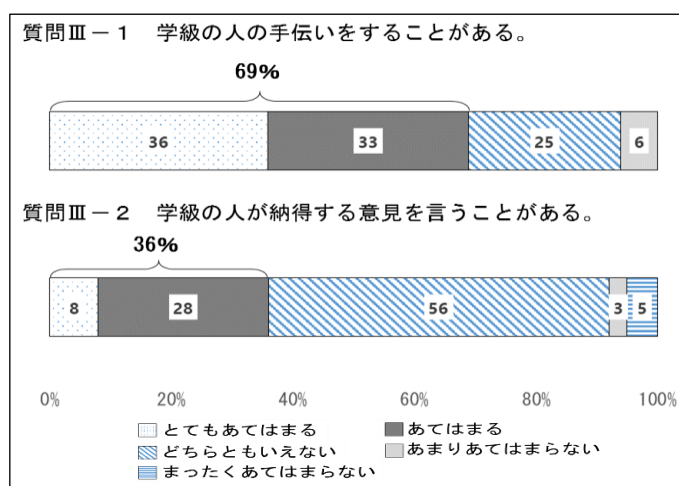


図6 貢献について

(イ) 考察

学級において、自分の意見を発表する機会が少ないのではないかと考える。授業等において、集団に対して貢献していると感じさせるために、話し合い活動の時間を設定し、グループ内や学級全体に自分の意見を発表する機会を増やす必要がある。

エ 自己有用感の土台である関係性について

(ア) 結果

自己有用感の土台である関係性に関する三つの質問に対して、「とてもあてはまる」、「あてはまる」と回答した生徒の割合は、60%を超えている。多くの生徒は、学級の人から支えられており、学級の人を信頼していると感じている。一緒に過ごすことで安心できていることも分かる。しかし、約30%の生徒は関係性が良いと感じていないことになる（図7）。

また、「学級の人を信頼している。」という質問に対して、「とてもあてはまる」、「あてはまる」と回答した割合は70%であるのに対して、「学級の人から信頼されている。」に対しては37%である。つまり、他者からは信頼されているが、自分自身でそれを自覚することができない状況が推察される。

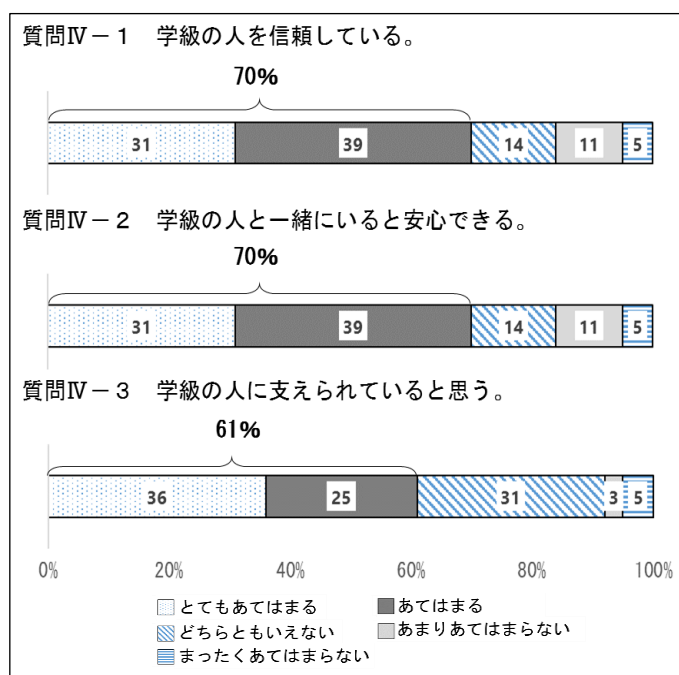


図7 関係性について

(イ) 考察

自己有用感の土台である関係性を高めるために、信頼している気持ちを何らかの形で表現し、相手に伝える場面を授業に取り入れる必要がある。関係性を高めることができれば、教室は今よりも更に安心できる場所となり、学校で自分の居場所があると実感させることにつながると考える。

オ 「学校楽しいーと」の自己肯定感について

(ア) 結果

レーダーチャートから、学校適応感の全体的なバランスは良い。学年平均と比較すると「自己肯定感」が少し低い(図8)。

(イ) 考察

「自己肯定感」の下位項目を見ると「他人から好かれている方だと思う。」の学級平均が2.43で、最も低い。

自己肯定感を高めるために、他者と関わる中で、自分の良さに気付かせたり、

集団活動の中で個に応じた役割を設定することにより、所属意識を高めたりする必要がある。自己肯定感に含まれる自己有用感を高めることが、自己肯定感を高めることにもつながると考える。

カ 自己有用感と学校回避感情について

(ア) 結果

学校回避感情とは、「病気でもないのに、普段、学校に行きにくい、または行きたくない。」と感じることである。自己有用感を学校回避感情が高い生徒と低い生徒で比較すると、自己有用感が低い生徒は学校回避感情が高かった。

(イ) 考察

生徒の自己有用感を高めることができれば、学校回避感情は低くなり、不登校の未然防止につながると考える。

3 本研究で目指す生徒の姿と授業の在り方

研究主題の基本的な考え方と、実態調査の結果と考察を踏まえ、本研究で目指す生徒の姿と授業の在り方を次のように捉えた。目指す生徒の姿の実現のために、全ての生徒に、授業において以下の活動を実践する。

自己有用感を構成する三要素	目指す生徒の姿	目指す授業の在り方
存在感	学級において、自分の意見や考えを発表することができ、集団の役に立ち、信頼されている生徒	集団において、存在感を感じさせるために、自分の意見を発表したり、役割を果たしたりする活動を実践する。
承認	他者の良い言動に気付き、認め伝えることができる生徒	他者と関わりをもたせ、互いに承認する活動を実践する。
貢献	学級において、自分の役割や他者の役割に対して、よく気付いて行動したり、手伝ったりすることができる生徒	学級の一員であるという自覚をもたせ、集団に対して貢献する活動を実践する。

4 自己有用感を高める三つの「いいね！」の活動の工夫

(1) 「自己有用感を高めるための取組」年間指導計画について

他者との関わりの中で自己有用感が高まることから、集団の課題を解決する活動を通して、資質・能力を育成する特別活動で実践することが最も効果的であると考え。作成した年間指導計画(表2)を基に学級活動において、計画的(学期の始め・終わり、学校行事の事前・事後)に「話し合い、認め合い、役割を果たす」場面を設定する。計画的・継続的に「話し合い、認め合い、役割を果たす」場面を設定することにより、生徒同士が絆づくりをし、目指す生徒の姿を実現でき、自己有用感を高めることにつながることができると考える。

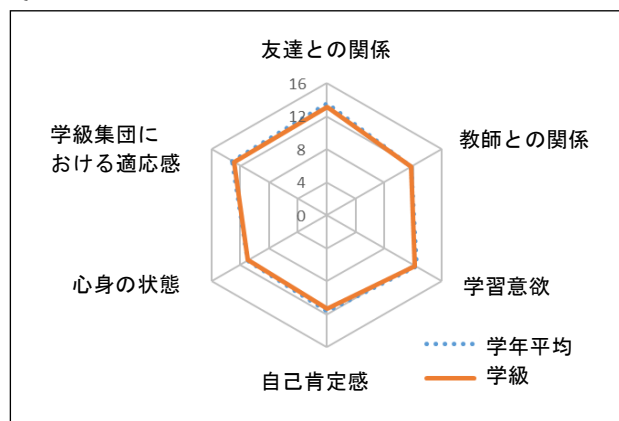


図8 対象学級の「学校楽しいーと」の状況

表2 「自己有用感を高めるための取組」年間指導計画

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
関連する 学校行事	始業式			合唱コンクール	体育大会	舞中祭 (文化祭)					修了式
学級活動	学級開き担任自己紹介クイズ 構成的グループエンカウンター「X先生を知る」を行う。 学級目標の設定 どのような学級にしたいのか、個人でキーワードを考え、それを基に、全員で学級目標を考え、合意形成を図る。	学級目標達成のための行動目標の設定 全員で実践できる行動目標を考え、話し合いにより、合意形成を図る。	合唱コンクール事前活動 合唱コンクールに向けて学級全員で実践する具体的な行動目標について、合意形成を図る。	合唱コンクール事後活動 合唱コンクールの取組を振り返り、学級全員で実践する具体的な行動目標について、どのような努力をしたのかを発表し、互いに認め合う。 体育大会事前活動 体育大会の意義を理解し、個人目標及び学級スローガンについて、合意形成を図る。 選手・応援団・役員等を選出する。	体育大会事後活動 体育大会の取組を振り返り、個人目標や学級スローガンを達成するために、どのような努力をしたのかを認め合う。 舞中祭事前活動 舞中祭の意義を理解する。本番に向けて、各役割グループで練習・準備する際の具体的な行動目標を考え、合意形成を図る。		舞中祭事後活動 舞中祭の取組を振り返り、学んだことを基に、今後の生活で取り組む具体的な常時活動内容を考え、合意形成を図る。	2学期の振り返り 自分自身と学級の2学期について振り返る。 学級目標を達成するための行動目標を実践できているかを振り返り、改善すべき点を話し合い、合意形成を図る。		1年間の振り返り 自分自身と学級のこれまでを振り返る。 残り1か月で、学級目標を達成するためには、何が必要であるかを考え、合意形成を図る。	1年間の振り返り 構成的グループエンカウンター「別々の花束」を行う。
朝の会 帰りの会 その他	生徒自己紹介クイズ 構成的グループエンカウターの「X先生を知る」の生徒版として、生徒が自己紹介クイズを作成し、朝・帰りの会で発表し、その他の生徒が解答する。 1日1人実施する。	行動目標の実践 全員で決めた行動目標を日々の学校生活で実践する。学級総務やその日の日直を中心に、振り返りを行う。	合唱コンクール事前活動 全員で決めた具体的な行動目標を基に、合唱練習を行う。			舞中祭事前活動 舞中祭に向けて、合意形成した具体的な行動目標を意識して、各役割グループで練習や準備を進める。	常時活動の実践 舞中祭の事後活動で決めた常時活動を実践する。活動が形骸化しないように、学級総務等が朝・帰りの会で振り返りを行う。	行動目標の実践 改善した行動目標を全員で実践する。学級総務やその日の日直を中心に、振り返りを行う。	行動目標の実践 改善した行動目標を全員で実践する。学級総務やその日の日直を中心に、振り返りを行う。	学級目標達成のための実践 これまでに学級で取り組んできた行動目標や常時活動を振り返り、残りの期間で実践していく。	

(2) ワークシートの工夫

ア 個人ワークシートについて

存在感を高めるために、自分の考えをまとめる個人ワークシート（図9）を作成した。個人ワークシートに自分が貢献した内容をまとめることにより、話し合い活動において、自信をもって発表することができると思った。

イ 「いいね！コメント」について

全ての生徒が互いに認め合うために、他の生徒からの評価が重要であると考えた。個人ワークシートに学校行事等で自分が特に努力したこと、日常の集団生活に生かせそうなことや大切だと思ったことを書かせる欄「いいね！コメント」を設定する。その後、他の生徒の個人ワークシートを読み、努力したことに対して承認する「いいね！コメント」を書かせる。その際、もらって嬉しいコメントを書くことが重要であることに気付かせるために、意図的な言葉掛けをする。自分が努力したことや認めてほしいと思っていることに対して、他者から「いいね！」と認めてもらえることにより、自己有用感が高まると考えた。

ウ グループ活動シートについて

話し合いの目的は何か、何を合意形成すべきであるかを理解させ、話し合いを円滑に進行させるために、グループの意見をまとめるワークシート（以下、グループ活動シートとする。）（図10）を作成した。グループ活動シートを活用し、個人の意見を付箋紙に書かせ、説明しながら貼らせることにより、全ての生徒の意見が可視化され、グループの意見をまとめやすくなり、存在感の高まりにつながると考えた。

(3) 話し合い活動の工夫

ア 事前準備について

これまで、学級活動において、話し合い活動を実践しても、時間が足りなかったり、話し合いが深まらなかったりした。そこで、グループの代表者を事前に集めて、話し合う内容を考えさせる時間が必要である。また、事前に話し合う内容を全体に伝え、授業までの間に気付いたことなどをメモする「全力で学校行事を成功させよう！事前シート」（図11）

2. 「舞中祭」を振り返り、自分が特に努力したことを書いてみよう！

発表の準備として、自分が特に努力した（集団に対して貢献した）内容を記入する。

3. 日常の集団生活に生かせそうなことや、大切だと思ったことを書いてみよう！

発表の準備として、集団生活に生かせそうな（集団に貢献できそうな）内容を記入する。

※ ここに書いた内容を、グループ活動で使うので、付箋紙に書き写そう。

4. 友達に上の2と3を読んでもらい、「いいねコメント」を書いてもらおう！

承認するために、「いいね！コメント」を書き合う。

図9 舞中祭の事後授業の個人ワークシート（一部抜粋）

グループ活動シート 個人の考えを基にグループで意見をまとめよう！

話し合いのポイント
① 学級全員で取り組めることか。
② 2年生の残り期間で取り組めることか。
③ 明日から毎日取り組めることか。

個人の付箋紙を貼る

存在感を高めるために個人の意見を可視化する。

キーワード

付箋紙に書いた内容で、重なりがあるものや大切だと思ったキーワードを記入する。

・ 個人が付箋紙に書いた内容で、重なりがあるものや、大切だと思ったキーワードを記入する。

学級で取り組む具体的な常時活動はこれだ！

キーワードを基に、学級で取り組む常時活動を定める。

： 学校生活のどんな場面で？
： どのようなことをする？

図10 グループ活動シート

全力で学校行事を成功させよう！事前シート

2年（ ）組（ ）番 氏名（ ）

自分の役割は（ ）です！

「舞中祭」を成功させよう！

うまくいっていること

① 何が？

② どのように？

③ なぜ？

困っていること

① 何が？

② どのように？

③ なぜ？

図11 「全力で学校行事を成功させよう！事前シート」（一部抜粋）

を事前に配布し、記入させることにより、自分の意見を発表しやすくなり存在感が高まると考えた。

イ 話し合う内容について

これまでの経験では、話合いの主題を生徒に決めさせることが少なかった。その結果、積極的な意見を発表する生徒は限定され、話合いが活性化しないことが多かった。そこで、生徒に学級目標や学校行事の目標を振り返らせ、学級の課題を明らかにさせる。生徒が明らかにした課題であれば、積極的に話合いを行い、集団に対して貢献することを実感させることができる考えた。

ウ 「舞中スタイル」について

「舞中スタイル（話合いの基本）」（以下、「舞中スタイル」とする。）（図12）は、話合い活動や発表の際に、互いに意見を伝え、合意形成や意思決定を図るために、話す、深める、聴くの三つの視点をまとめたものである。自己有用感を高めるためには、相手を認めることに加え、相手から認めてもらえたと感じさせる

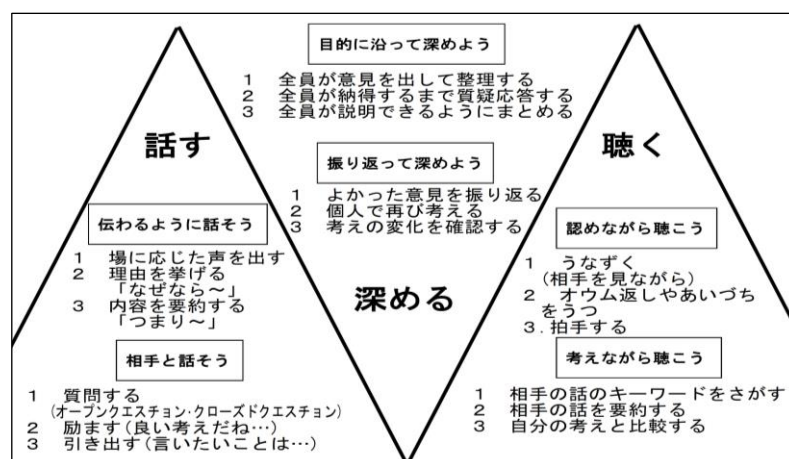


図12 「舞中スタイル（話合いの基本）」

ことが重要であると考えている。そのためには、話合い活動において、積極的に発言するだけではなく、「聴く」ことを特に意識させたい。承認する行動が重要であることを実感させるために、「舞中スタイル」のよりよい活用方法を工夫し、相手を見て、うなずきながら聴くなど、発言した人がしっかりと聴いてもらえていると感じるような聴き方を身に付けさせる。

エ 話合いのルールについて

これまでの経験では、話合い活動における役割分担を明確にしていないことがあった。その結果、全ての生徒が意見を発表できなかったり、時間内に意見がまとまらなかったりすることがあった。そこで、話合いのルールを設定し、生徒に提示する必要がある。

- 1 司会者（進行役）、書く人、発表する人を決める。
- 2 司会者から自分の意見を発表する。
- 3 理由を説明しながら、付箋紙をグループ活動シートに貼る。
- 4 時計回りに、必ず全員が発表する。
- 5 困ったことや質問があれば、先生を呼ぶ。
- 6 発表者に体を向けて、相手を認める気持ちで、うなずきながら聴く。

図13 話合いのルール

「話合いのルール」（図13）を、生徒がいつでも確認できるよう配布し、話合い活動が円滑に進行できるようにする。全ての生徒に意見を発表させ、集団に対して貢献できたと実感させることが、存在感を高めることにつながると考えた。

(4) 学校生活における「自己有用感を高める場面（例）」について

学校生活において、生徒の自己有用感を高める場面を整理するために、教職員のための研修の手引「自己指導能力を育成する学級経営（例）」を基に、生徒の自己有用感を高める三つの「いいね！」を伝える「自己有用感を高める場面（例）」を作成した（表3）。

教師が意識して生徒と関わることにより、自己有用感の三要素である存在感、承認、貢献をバランスよく高められ、目指す生徒の姿を実現できると考えた。

表3 「自己有用感を高める場面（例）」

教育活動等の場	自己有用感を高める場づくり	存在感	承認	貢献
登校時	○ 親しみを込め「おはよう」の挨拶をし、一人一人の名前を言って、一声掛ける。	○	○	
朝の会	○ 一人一人の名前を呼んで、表情を見ながら出席をとる。 ○ 顔の表情等を観察し、気になる生徒に声掛けをする。 ○ 昨日の欠席者・早退者には必ず声掛けをする。 ○ 黙想させ、自分の役割（係・当番・一人一役）等を確認させる。 ○ 日直の生徒を励ます。	○ ○ ○ ○	○ ○ ○	 ○ ○
各教科の授業	○ 生徒がグループで、あるいは自分で考えて決めるというやり方を導入する。 ○ 自分なりの考えをもって、授業に臨めるように課題プリントや個人思考ができる時間を設定する。 ○ 生徒一人一人の違いを尊重した授業を展開する。 ○ 指名するときは、必ず名前を呼ぶ。番号などで指名しないようにする。 ○ 全ての生徒に出番を与える。そのためには、例えば感性や経験など多面的な角度からの発問をする。あるいは、小グループで答えを考える場を用意して、普段おとなしい生徒に小グループの結論を発表させるようにする。 ○ 誤りや間違いを言った生徒を冷笑しないで、温かく見守る姿勢を育てる。 ○ どんなにたどたどしい発言でも、心を込めて聴く。 ○ 授業中のつぶやきを教師が聞き逃さず取り上げる。 ○ 相手の人間性を認めた上で、相手のつまづきを修正する意見を出させるようにする。 ○ 生徒の発言の中に、友達に対する冷たい言葉が出ないように日頃から指導する。 ○ 常に生徒を励まし、勇気付けて、褒める。 ○ 授業後に回収したノートやワークシートには、生徒一人一人の学習の過程を認め、励ますようなメッセージを書いて返却する。	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	 ○
給食	○ 自分の当番の仕事等は速やかに衛生的に行うようにさせる。 ○ グループに入り、一緒に食事しながら声を掛け、楽しく昼食をとるようにさせる。	○	○	○
昼休みなど	○ 生徒の望ましくない行動を見たら、頭ごなしに叱らずに、まず理由をよく聴く。 ○ 廊下等で会ったとき、生徒に声を掛ける。 ○ 生徒と雑談などをして、話の聴き手になる。	○ ○ ○	○ ○ ○	
清掃活動	○ 分担を決め、手順をはっきりし、各自責任をもたせるようにする。 ○ 教師は必ず清掃の場へ行って、生徒と一緒に言い、活動を認めて励ます。	○ ○	 ○	○
帰りの会	○ 黙想し、今日一日を生徒が自ら振り返り、自分を見つめて明日への取組を考えさせるようにする。 ○ 一日の中で、生徒のすばらしかった行動を学級全員に紹介して称賛する。 ○ 日直の生徒の労をねぎらう。	 ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
放課後	○ 学級日誌、個人日誌へコメントを付ける。 ○ 今日、言葉を交わせなかった生徒に声を掛け、話をする。 ○ 気になる生徒に仕事の手伝いをしてもらったりして、話をする機会をつくる。 ○ 「さようなら」の挨拶を元気に交わす。	○ ○ ○ ○	○ ○ ○	 ○

※ 平成31年度 教職員のための研修の手引「自己指導能力を育成する学級経営（例）」を基に作成

※ 存在感，承認，貢献の欄の○印は，6 ページの「目指す生徒の姿」を基準とした。

5 検証授業Ⅰの実際と考察

(1) 検証の視点

生徒の自己有用感を高める活動を行うことにより、目指す生徒の姿を実現できるのかを検証する必要がある。そこで、以下のような検証の視点を設定し、検証授業を実践した。

【視点１：存在感】	自己有用感の存在感を高める視点から、全員がグループ内で自分の意見を発表する場面を設定する。
【視点２：承認】	自己有用感の承認を高める視点から、互いの意見等を認め合う場面を設定する。
【視点３：貢献】	自己有用感の貢献を高める視点から、自分の役割を意識して、責任を果たす場面を設定する。

(2) 授業の実際

ア 題材名 「合唱コンクールを成功させよう。」

イ ねらい

- ・ 学級の一員としての自覚を高めさせ、学級に対する所属感を深めさせる。
- ・ 学級における課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図り、実践させる。

ウ 授業の概要

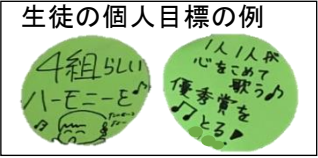
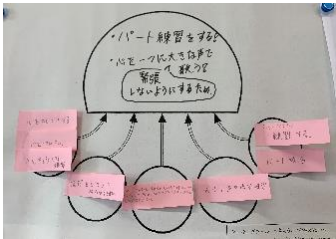
	合唱コンクールに向けた事前授業(1/2時)	学級目標達成に向けた事前授業(2/2時)
実施時期	7月5日(金)	7月12日(金)
実施学級	霧島市立舞鶴中学校2年4組37人(男子18人, 女子19人)	
題材	合唱コンクールへの参加	学級目標の達成
目標	合唱コンクールを成功させるために、何をすべきか考えよう。	1学期を振り返り、学級目標を達成するための行動目標を考えよう。

イ 第1時のねらい

- 合唱コンクールに向けて、残りの期間で取り組む具体的な行動目標を合意形成させる。
- 学級の一員としての自覚をもたせ、役割に対して責任を果たすことにより、学級への所属感を高めさせる。
- 友達の良い取組に着目させ、それを認めさせる。
- 自分の取組が、学級への所属感を高めることを理解させる。

ウ 第1時の実際

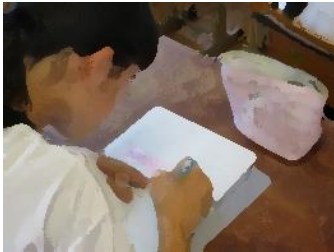
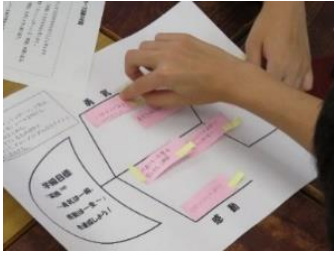
過程	主な学習活動	教師の働き掛け	生徒の反応 (○:ワークシートの記述, ◇:観察)
導入	1 アイスブレイク アドジャントーク・テーマ - 好きな食べ物と飲み物 - 苦手なもの 1学期がんばったこと - 合唱コンクールの自由曲 - マイブーム - 好きな芸能人・スポーツ選手など - 夏休みの計画 - 合唱コンクールの練習 - 体育大会で楽しみなこと - 最近、読んだ本	・ トーク内容に合唱コンクールに関する項目を入れた構成的グループエンカウンター「アドジャントーク」を行う。今、取り組んでいることを発表させることにより、合唱コンクールへの意欲を高めさせる。 【視点１：存在感】	○ 自分の意見が言いやすかった。 ○ 友達に聞いてもらい、認めてもらえると嬉しい。 ◇ 和やかな雰囲気の中で自分の意見を発表する姿が見られた。

展 開	2 ペアで合唱コンクールに向けての自分の取組を確認する。  教室後方の掲示物	教室後方に掲示してある合唱コンクールの個人目標を確認させ、これまでの自分の取組を振り返らせる場面を設定する。 【視点3：貢献】	○ 最初に目標を立てただけで、何も考えていなかった。自分の役割を確認して、責任を果たす。 生徒の個人目標の例 
	3 合唱終了後のことを想像し、合唱コンクールに向けた行動目標を考え、付箋紙に記入する。	合唱コンクール終了後「どのような気持ちや表情になっていたか。」「友達や担任の先生とどのような話をしたいか。」などを想像させる場面を設定し、残りの期間で何をすべきかを考えさせる。 【視点3：貢献】	○ 合唱コンクールへの思いがみんな同じであることは確かである。
	4 グループ内で自分の意見を発表する。	自分の意見を、グループ内で発表する場面を設定する。 【視点1：存在感】	○ グループ活動で、しっかりと自分の意見を言えてよかった。 ○ 今まであまり自分の意見を出すことはなかったけど、今回は自分から意見を出すことができたので、よかった。
	5 合唱コンクール本番までの残りの期間で行う、具体的な行動目標をグループで話し合い、合意形成する。	生徒の自主性に任せ、話し合いを見守る。指導や支援が必要な場面を見極め、適宜指導や支援を行う。 【視点3：貢献】	○ 合唱コンクールに向けて今後どのような練習をすべきかをまとめることが難しかったけれど、改めて考えられてもっと頑張ろうと思った。
	6 黒板に貼られた、全てのグループ活動シートを確認する。 	発表や話し合いが可視化できるように、グループ活動シートとして、思考ツール「クラゲチャート」を活用させる。 【視点1：存在感】 【視点3：貢献】	○ みんなが優秀賞を取るために何を考えているのかが分かった。 生徒が合意形成した具体的な行動目標 - 練習時間も本番のように、毎回大切に歌うようにする。 - 歌詞の意味を考え、集中して歌い、歌声を一つにする。
終 末	7 本時の振り返りとして、ワークシートに自己評価と授業の感想を記入する。	ペアで互いの感想を確認させる。 【視点2：承認】	○ 人の意見を聞くことで、自分の考えを深められるのが、話し合いの良さだと改めて感じた。

エ 第2時のねらい

- 1学期の自分の様子を振り返らせ、学級目標を達成するために、自分が取り組むべき行動目標を考えることが、学級の所属感を高めることを理解させる。
- 友達の行動目標に着目させ、それを認め、自分の考えを深めさせる。
- 学級において、自分の意見を発表させるなど、集団に貢献することにより、学級の一員でよかったという存在感を高め、生徒の自己肯定感やその中の自己有用感を高めさせる。

オ 第2時の実際

過程	主な学習活動	教師の働き掛け	生徒の反応 (○：ワークシートの記述, ◇：観察)
導入	1 1学期を振り返る。 学級目標 「笑顔 ¹⁰⁰ ～勇気は一瞬、感動は一生～」	・ 1学期を振り返らせ、学級目標を意識して生活できていたかを確認させる場面を設定する。 【視点3：貢献】	○ 普段の生活で、あまり学級目標を意識できていない。
	2 学級目標を達成するための行動目標を考える。 	・ 自分の考えた行動目標を付箋紙に書かせる。 【視点3：貢献】	○ 学級のために、個人が行動目標を考えることは良いアイデアだと思う。 ○ 学級の現状を振り返り、学級目標を達成するための行動目標を真剣に考えることができた。
展開	3 グループ内で自分の考えを発表する。 	・ 自分の考えを書いた付箋紙をグループ活動シートに貼りながら、発表させる。 【視点1：存在感】 ・ グループ活動シートとして思考ツール「フィッシュボーン」を活用させる。 【視点1：存在感】 【視点3：貢献】	○ 人に頼らず、できるだけ自分で発表するようにする。 ○ 一人一人が友達の良いところを見つけてあげて褒め合える関係になると良いクラスになると思う。また「ありがとう」の気持ちも大事である。
	4 互いの意見を認め合うために、いいねシールを貼る。 	・ 友達の発表の中で、良いと感じたものに、小さな付箋紙（以下、いいねシールとする。）を貼らせる場面を設定する。 【視点2：承認】	○ 人の良いところを褒めると、そこで自分では気が付かなかった自分の良いところに気付ける。それをいろんなことに生かしていけるから良いと思う。
	5 グループで話し合い、学級全員で取り組む行動目標を決める。 	・ 生徒の自主性に任せ、話し合いの様子を見守る。指導や支援が必要な場面を見極め、適宜指導や支援を行う。 【視点1：存在感】 【視点3：貢献】 確認事項の設定 - 具体的な行動目標になっているか。 - 学級全員で取り組むことができるか。	○ これからどうするか考えるときも、みんな笑顔で真剣に考えていた。4組は絶対に達成できると思った。 生徒が合意形成した行動目標 帰りの会で日直がその日に学級に貢献した人を全体に発表する。

終 末	6 本時の振り返りとして、ワークシートに自己評価と授業の感想を記入する。 	・ ペアで互いの感想を確認し合う。 【視点2：承認】	○ 周りの人を良く見て、気が利いている人や工夫して頑張っている人に気付けるようになり、気付いたら、それを積極的に本人に伝える。
--------	---	--------------------------------------	---

(3) 成果と課題（検証授業Ⅰ後のアンケート調査 対象：霧島市立舞鶴中学校2年4組37人）

ア **【視点1：存在感】**について

(ア) 成果

自分の意見をグループ内で発表する場面を設定した。事前に自分の意見をまとめて、個人ワークシートに記入する時間を設定したことにより、生徒は自分の意見に自信をもち、安心して発表していた。

存在感について、検証授業Ⅰ前後の実態調査結果（図14）を比較すると、「学級の人役に立っていると思う。」に対して、「とてもあてはまる」、「あてはまる」と回答した生徒の割合は、41%から47%に、「学級の重要な一員だと思う。」に対しては、47%から50%に増加している。グループ内で発表する場面を設定し、自分の意見を発表することにより、生徒の存在感が高まったと考えられる。

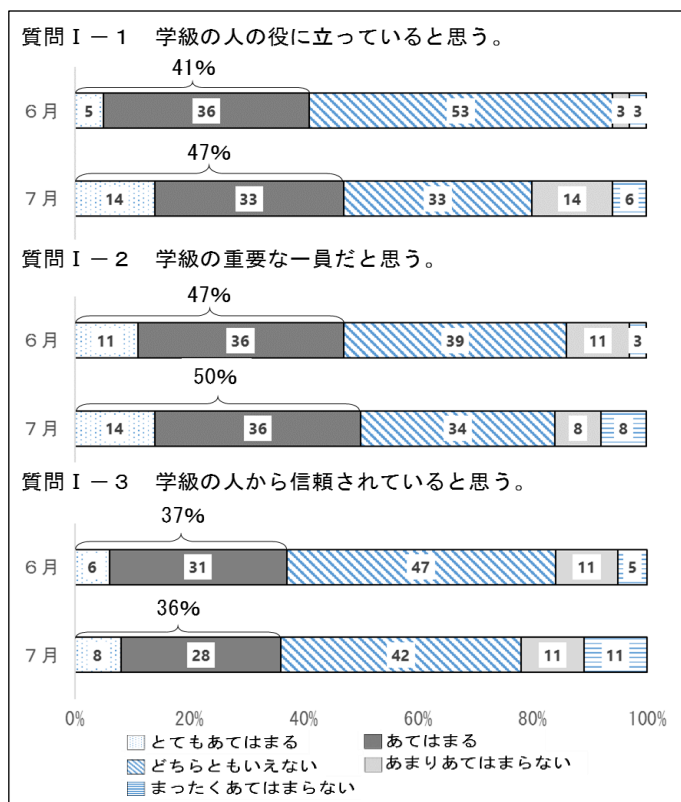


図14 存在感について

(イ) 課題

「学級の人から信頼されていると思う。」に対して、「とてもあてはまる」、「あてはまる」と回答した生徒の割合はあまり変化がない（図14）。自分自身で「学級の人役に立っている。」「学級の重要な一員だ。」と思っていなくても、他者から「信頼されている。」と思えないということが明らかとなった。今後は、人の役に立てば、他者に信頼されることに気付かせるような活動の工夫が必要である。

グループ活動シートとして、「クラゲチャート」や「フィッシュボーン」のような思考ツールを活用した。話合いの過程を可視化することは達成できたが、これらの思考ツールが話合いの内容に最適であるかの検証が不十分である。生徒が貢献した内容を話合い活動で発表しやすいようにするために、グループ活動シートを自作する必要がある。

イ 【視点2：承認】について

(ア) 成果

他の生徒が考えた行動目標に「いいね！シール」を貼る場面を設定した。「いいね！シール」を貼ってもらえた生徒は嬉しそうであった。生徒がワークシートに記入した授業の感想（図15）では、「普段から友達の良いところを褒めるようにしたい。」というような感想を書いた生徒が74%を占め、承認することや貢献することへの意識が高まったことが伺える。

承認に関する二つの質問に対して、「とてもあてはまる」、「あてはまる」と回答した生徒の割合は増加している（図16）。生徒同士で承認し合う意識が高まったと考える。

(イ) 課題

「いいね！シール」を貼ってもらえた生徒がグループにより偏っており、「いいね！シール」を貼ってもらえない生徒もいた。教師は、目立たないが地道な活動をしている生徒を全体の前で認め、集団に対して貢献していることを理解させる必要がある。よって、全ての生徒が互いに認め合えるような場面の設定が必要である。

「舞中スタイル」を活用させて、主体的な話し合いをさせた。検証授業前後の実態調査の結果を見ると、生徒の意識は高まっていない（図17）。授業の最初に確認するだけではなく、「いつでも、どこでも、誰にでも」活用するという意識をもたせられるような工夫が必要である。併せて、話し合いのルール等を示す必要がある。

付箋紙に自分の意見を書き、グループ活動シートに貼ると、自分の考えが個人ワークシートに残らない。授業の終盤に振り返りをさせる際、自分自身の考えの変化に気付かせるために、個人ワークシートに自分が書いたことが残るように、個人ワークシートの改善が必要である。

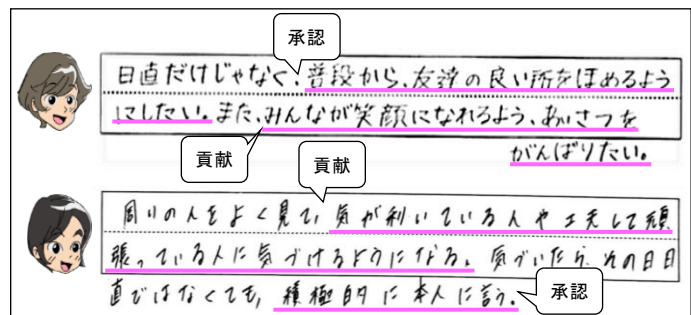


図15 生徒の感想

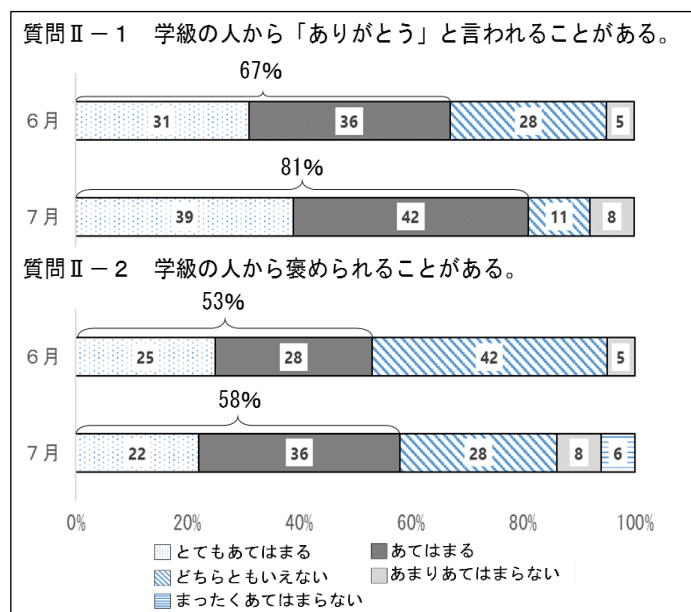


図16 承認について

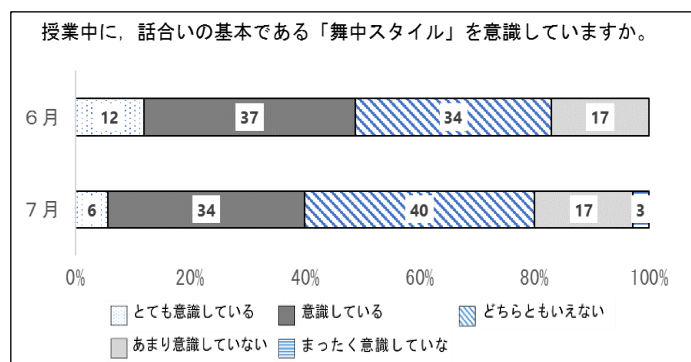


図17 「舞中スタイル」について

ウ 【視点3：貢献】について

(ア) 成果

学級目標や合唱コンクールに向けての個人目標を振り返らせる場面を設定した。自分の取組を振り返らせると、目標を立てただけで、その後あまり意識していないという生徒がいた。このような生徒に自分がどの程度目標を意識して毎日の生活や活動を行っているのかを気付かせることができた。

全員で行動目標を決める際、「毎日笑顔で過ごす」という無難なものにまとまりそうになったが、学級総務がリーダーシップを発揮して、自分の役割を果たした。その他の生徒も、学級総務をよくフォローし、学級の一員として、全体のことを考えた意見を出す場面が見られた。学級総務が多くの生徒からよく意見を拾い上げ、多くの意見が出され、合意形成することができ、学級目標を達成するための行動目標を決めることができた。

(イ) 課題

貢献に関する二つの質問について、検証授業前後の結果にあまり変化がない（図18）。学級の一員として自覚をもち、自分で考えた意見を発表するなどの行動は集団に対して貢献していることにつながるが、生徒に気付かせたり、感じさせたりするような工夫が足りなかった。グループ活動で、より具体的な役割を与えたり、自分たちで役割を分担させたりするような場面を設定する必要がある。

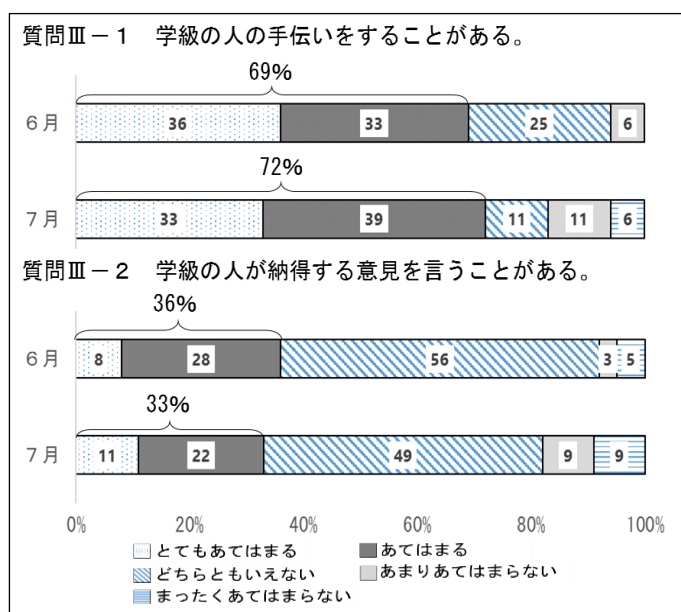


図18 貢献について

(4) 検証授業Ⅱに向けて

検証授業Ⅰを終えて、課題と改善点が明らかになった。（課題：▲，改善点：◇）

【視点1：存在感】	▲ 他者から信頼されていると思えない。 ◇ 人の役に立てば、他者から信頼されることに気付かせるために、自分の意見をまとめさせる個人ワークシートを自作する。 ◇ 話し合わせたい内容に最適なグループ活動シートを自作する。
【視点2：承認】	▲ 「いいね！シール」を貼ってもらえる人に偏りがある。 ▲ 「舞中スタイル（話合いの基本）」の活用が不十分だった。 ◇ 全ての生徒が互いに認め合うために、他者評価をさせる場面の設定やワークシートの工夫を行う。
【視点3：貢献】	▲ 学級の一員としての自覚を感じさせることが不十分である。 ◇ グループ活動で、具体的な役割を与え、自分たちで役割分担をさせる場面を設定する。

検証授業Ⅱでは、生徒の自己有用感を高めるために、検証授業Ⅰで明らかになった課題と改善点を基に、より具体的な活動の工夫を行う必要がある。

検証授業Ⅰでは、活動の振り返りや価値付けをする事後の活動が不十分だったので、検証授業Ⅱでは、本校の文化祭である「舞中祭」の事前・事後に授業を行い、活動の振り返りや価値付けを行う。

6 検証授業Ⅱの実際と考察

(1) ねらい

文化祭（以下、舞中祭とする。）の事前授業では、学校行事の意義や目的を理解させ、目的を達成させるために、話し合い、認め合い、役割を果たす活動の工夫を行う。舞中祭の舞台発表は学級単位ではなく、学年単位でダンスや合唱等を混在させた構成劇を行うので、生徒は同じ学級の人がどのような活動をしているのかを詳しく知らない。同じ学級の人がどのような活動をしているのかを詳しく知ること、承認することができると思う。そこで、各役割（例えば、役者・ダンス・合唱等）の代表者に活動内容を学級全体に発表させることにより、他の生徒がどのような活動をし、集団に貢献しようとしているのかを知ることができると思う。

学校行事終了後には、教師や学級の人から、活動の価値付けをしてもらう必要があると思う。そこで、舞中祭の事後授業では、学校行事を振り返らせ、互いに良さを認め合い、学んだことを今後の生活にどのように生かすのかを全員で考え、実践につなげさせる。

(2) 検証の視点

検証授業Ⅰの課題と改善点を基に、検証授業Ⅱの視点を次のように設定した。

【視点1：存在感】	話し合い活動において自分の意見を他者に伝える場面や、相手のことを認めていることを伝え合う場面を設定する。
【視点2：承認】	互いの良さを認め合う活動の工夫をし、自己評価や他者評価をさせる場面を設定する。
【視点3：貢献】	集団の一員として自覚をもたせ、自分の行動が役に立っていると気付かせたり、感じさせたりする場面を設定する。

(3) 指導計画（全3時間）

月/日	活動の場	活動の主体	活動の内容（活）、指導上の留意点（留）
10/15 (火)	帰りの会	学級全体	【活】 事前授業で、舞中祭の練習や準備でうまくいっていることや困っていることについて、話し合い活動を行うことを知る。 【留】 舞中祭の意義等を理解し、目的をもって練習や準備をさせたり、現在の課題を明確にさせたりするために、これまでの自分の取組を事前シートにまとめさせる。 【視点3：貢献】
	放課後	・学級総務 ・各役割の代表者	【活】 舞中祭の練習や準備を振り返り、これまでにどのような取組をしてきたのかを、他の役割の人たちに知ってもらうために、次の学級活動で取組過程を発表することを知る。 【留】 各役割の代表者としての役割を果たすように依頼する。 【留】 自分たちの役割はどのような練習や準備をしているのかを分かりやすくまとめておくように指示する。
随時	・朝の会 ・帰りの会 ・準備時間の後 ・休み時間	個人	【活】 事前授業において、練習や準備でうまくいっていることなどを話し合う。準備として、事前シートに練習や準備で気付いたことをメモしておく。【視点3：貢献】 【留】 事前シートは事後授業で活用するので、学校で書いて、授業時に持参するように指示する。 【留】 練習や準備終了後、各役割の代表者は、メンバーにメモを書くことを促すように指示する。
10/21 (月)	学級活動 (1/3)	学級全体	【活】 事前シートに記入した内容を基に、舞中祭を成功させるために、残りの期間でできる具体的な取組を考える。 【視点3：貢献】 【留】 グループで話し合わせ、できるだけ多くの生徒の意見を反映した取組になるように促す。【視点1：存在感】
随時	・学年の練習や準備の時間 ・昼休み	各役割	【活】 各役割で決めた具体的な取組を基に、練習や準備を進める。【視点3：貢献】 【留】 授業者は学級担任と連携し、事前授業で活用したグループ活動シートを確認させ、本番に向けての練習や準備の意欲を更に高めさせる。【視点1：存在感】

10/25 (金)	舞中祭 (文化祭)	学校全体	活 練習や準備の成果を発表する。 留 舞中祭を参観し、各役割の取組の成果を確認する。
10月 下旬	学級活動 (2/3)	学級全体	活 舞中祭を振り返り、感想を書く。 【視点１：存在感】、【視点２：承認】 留 自分の役割で取り組んだことだけでなく、他の生徒の取組で注目したことについても書かせる。
11/ 1 (金)	学級活動 (3/3)	学級全体	活 舞中祭を振り返り、練習や準備で学んだことを基に、今後の学校生活で取り組む具体的な常時活動を考え、合意形成を図る。 【視点１：存在感】、【視点３：貢献】 留 具体的な常時活動を合意形成させる際、全員で取り組むことができるかを確認させる。
随時	・朝の会 ・帰りの会 ・授業中 ・掃除時間 など	個人	活 自分たちで合意形成し、決定した常時活動を実践していく。活動状況を朝の会などで報告し、全員で振り返りを行う。 【視点３：貢献】 留 授業者は学級担任と連携し、決定した常時活動が形骸化しないように、学級総務等に励ましの声掛けをし、全体に促すように支援する。

(4) 授業の実際

ア 題材名 「舞中祭を成功させよう。」

イ ねらい

- 学級の一員としての自覚を高めさせ、学級に対する所属感を高めさせる。
- 舞中祭の意義を理解させ、事前活動、本番、事後活動を通して学んだことを今後の学校生活に生かすための常時活動等について話し合い、合意形成を図り、実践させる。

ウ 授業の概要

	舞中祭に向けた事前授業 (1/3時)	舞中祭終了後の事後授業 (3/3時)
実施時期	10月21日 (月)	11月 1 日 (金)
実施学級	霧島市立舞鶴中学校 2 年 4 組 37 人 (男子18人, 女子19人)	
題 材	舞中祭への参加	
目 標	舞中祭の取組過程を振り返り、成功させるために必要なことを考えよう。	舞中祭の反省を日常生活に生かしていこう。

エ 第 1 時のねらい

- 舞中祭の意義や目的を理解した上で、取組過程を振り返り、練習や準備に対する意欲が更に高まるようにする。
- 取組過程の成果と課題を考えさせ、舞中祭を成功させるための話し合い活動に積極的に関わり、全員で課題を解決する方法を探れるようにする。
- 話し合いで相手の話をしっかり聴かせ、相手の意見を認めさせる。

オ 第 1 時の実際

過程	主な学習活動	教師の働き掛け	生徒の反応 (○：ワークシートの記述、◇：観察)
導入	1 舞中祭に向けた自分の取組を振り返る。 	・ 舞中祭の意義や目的を理解させるために、ペアで話し合わせる。 ・ 学級目標を意識して舞中祭に向けての練習や準備をしているのかを確認させる。 【視点３：貢献】	○ 舞中祭をする理由を考えたことがなかった。今日、その目的を考えることができてよかった。 ○ ペアで話し合う際、互いに体を向け合ったり、うなずきながら聴いたりすることができていた。 ◇ 発表者に対して、体を向けて聴くことができていた。

展 開	2 役者やダンス等の各グループの取組状況の発表を聞く。 	- 各グループの取組状況や努力していることを発表させる。 【視点1：存在感】 - 役割は異なるが、舞中祭を成功させる同じ目標に向かっていることに気付かせる。個人の努力が学級の所属感を高めることを理解させる。 【視点3：貢献】 「舞中スタイル」の意識付けのために、全員で音読してから活動を始めさせる。 【視点2：承認】	- 各グループの役割やうまくいっていることなどを全然知らなかった。 - 今日の授業で、女子のパートがどうなっているのか分かった。今後はもっと全パートで積極的に練習していこうと思った。 ◇「舞中スタイル」の聴く観点を意識しようとしている生徒の姿が見られた。
	3 これまでの練習や準備を振り返り、自分の役割でうまくいっていることや困っていることをワークシートに記入する。 	- 自分の役割に対してどのように努力してきたのかを確認させ、事前シートと個人ワークシートを使い、うまくいっていることや困っていることを書かせる。 【視点3：貢献】	- 教室では声が出ているのに、体育館ではあまり出ていない。恥ずかしいという気持ちと間違えていたらどうしようという不安の気持ちがあるから。 ◇役割分担を明確にすることで、責任を果たそうとする生徒の姿が見られた。
	4 各グループで話し合い、合意形成する。  話し合いのテーマ 舞中祭を成功させるために、残りの期間でできる具体的な取組は何か。	- 個人の課題を集団の課題として捉えるために、うまくいっていることや困っていることを出し合わせる。 【視点1：存在感】 - 舞中祭を成功させるために、本番までにできることを考えさせる。 - 解決方法等を話し合わせ、合意形成させる。 【視点3：貢献】	- 困っていることをみんなで出し合い、改善点が見つかったのがとてもよかったと思う。まだまだ練習が足りていないからもっと頑張りたい。 - 自分の意見を伝えたり友達の意見を聞いたりすることで、考えがもっと深まった。改善点もまとめられたので、舞中祭に生かしていきたい。
	5 各グループ内で互いの取組に対してコメントを書き合う。 	- 互いに、うまくいっていることを認め合い、困っていることにアドバイスさせる。 - 各グループ内でワークシートを回し、認め合わせるために、相手の取組についてコメントを書かせる。 【視点2：承認】	踊っているときに「顔が引きつっているよ。」と言われて初めて気付いた。これからの少ない時間で踊れるように頑張ります。初めて気付くことがたくさんあった。
終 末	6 本時の振り返りとして、自己評価と感想を書く。 	- 舞中祭終了後の事後授業で、自己の変容を確認させるために、ワークシート内に、今回と次回で自己の変容を確認できる自己評価欄をつくり、記入させる。 【視点2：承認】	- 自分たちで決めた目標をやり遂げて舞中祭が良い思い出になるようにしたい。 - うまくいっていることでできていないこと、困っていることがグループ内での違いが激しかった。舞中祭をみんなで満足できるようにしたい。

カ 第3時のねらい

- 舞中祭への取組を通して学んだことを基に、2年生の残りの期間で学級目標を達成するための具体的な方法を考えさせる。
- 自他の意見を基に、グループで話し合い、今後学級で取り組む常時活動を合意形成させる。
- 互いの良さを認め合わせ、集団への所属感や連帯感が高まるようにする。

キ 第3時の実際

過程	主な学習活動	教師の働き掛け	生徒の反応 (○:ワークシートの記述, ◇:観察)
導入	1 舞中祭を振り返り、一番の思い出をペアで話し合う。 	- 舞中祭を振り返らせるために、一番の思い出を隣の人と意見交換し、互いに認め合わせる。 【視点2:承認】 - 相手の話を聴く練習として、話し合いの基本「舞中スタイル」を活用し、うなずきながら聴くことを意識させる。 【視点2:承認】	- 踊れないところがないように、間違えないように、本番ギリギリまで、みんなと合わせて踊っていた。 - 合唱で大きな声で劇のフィナーレを飾る歌を歌うことができた。
	2 舞中祭における自分の取組を振り返り、個人ワークシートに記入する。 	- 自分の取組を振り返り、個人ワークシートに記入させる。 【視点3:貢献】 - 話し合い活動を充実させるために、個人の考えを書かせる時間を確保する。書いた内容は、グループ活動で使用するので、付箋紙に転記させる。 【視点1:存在感】 【視点3:貢献】	- モザイクアートの枚数が多かったけど、諦めずに最後まで終わらせることができた。 - ダンスの振りが分からない友達に教えてあげることができた。
展開	3 グループで話し合う。 	- 話し合いをスムーズに進めさせるために、役割を決める。 【視点3:貢献】 - 個人ワークシート裏面に話し合いのルールやポイントを掲載し、手元に置かせて話し合わせる。 【視点1:存在感】 - 話し合いの内容や過程を可視化するために、意見をまとめるグループ活動シートを配布する。 【視点1:存在感】 【視点3:貢献】	- 舞中祭の反省点をグループの全員で出し合ってまとめるのを協力して行うことができた。 - 残り少ない2年4組をこれから最高のクラスにするために、みんなで決めた常時活動をしっかり取り組みたい。 ◇ グループ活動シートを活用し、話し合いをさせることにより、多くの生徒の意見を反映した具体的な常時活動を合意形成することができた。
	4 グループの代表者が発表する。 	- 各グループで決めた常時活動を全体で共有するために、グループ活動シートを黒板に貼らせ、各グループの代表者に発表させる。 【視点1:存在感】	グループで決めるときになかなか意見が出てこなくて大変だったけど、最終的にみんなの意見がまとまって良いアイデアが出たので、とても嬉しかった。

展 開	5 他の生徒に「いいね！コメント」を書く。 	- 互いの良さに気付かせ、認め合わせるために、他の生徒が個人ワークシートに書いた内容を読ませ、それに対して、「いいね！コメント」を書かせる。 - もらって嬉しいコメントを書くことが重要であることに気付かせる。 【視点1：存在感】 【視点2：承認】	- スピーチの時、落ち着いていて速さもちょうどよかった。 - みんな練習のときから諦めず最後まで頑張っていて、最後までやり遂げられてよかった。 - 良いところを書いてもらえてほっとした。
終 末	6 本時の振り返りとして、自己評価と感想を書く。 	- 舞中祭前後での自己の変容を確認させるために、前回使用した個人ワークシートの自己評価欄に記入させる。 - 舞中祭に向けて努力したことや友達との関わりで感じたことについて書かせることにより、自己の変容に気付かせる。 【視点1：存在感】 【視点2：承認】	- お互いの意見を認めて合って良い目標ができた。今まで「出来ていない」と思っていたことが解決できたので、すっきりした。またクラス全体で話し合いたい。 - みんなからの「いいね！コメント」が嬉しかった。

(5) 成果と課題（検証授業Ⅱ後のアンケート調査 対象：霧島市立舞鶴中学校2年4組37人）

ア 【視点1：存在感】について

(ア) 成果

検証授業前、生徒Aは、話合いを円滑に進めようと、集団に対して貢献しているが、他者から承認してもらえていないのではないかと不安から、自信がもてない様子である。生徒Bは、生徒Aを承認しているが、そのことを生徒Aに伝えていない。そこで、検証授業Ⅱの第2時では、主な学習活動の5に【視点1：存在感】、【視点2：承認】を踏まえ、相手を認めて伝え合う場面を設定した。

検証授業後の感想によると、生徒Bは、前回の授業で生徒Aが話合いをまとめてくれたことに対して、「ありがとう。」と伝えることができていた。また、生徒Aも「今日はとてもいい話合いができた。」と記述している。つまり、承認するだけではなく、承認したことを相手に伝えることにより、互いの存在感が高まったと考える（図19）。

生徒Aは、存在感に関する「学級の人役に立っていると思う。」「学級の重要な一員だと思う。」「学級の人から信頼されていると思う。」の三つの質問に対して、全て「とてもあてはまる」と回答した。相手を認めて、伝え合う場面を設定することにより、存在感が高まったと考える。このように、存在感に関する三つの質問に対して、全て「あてはま

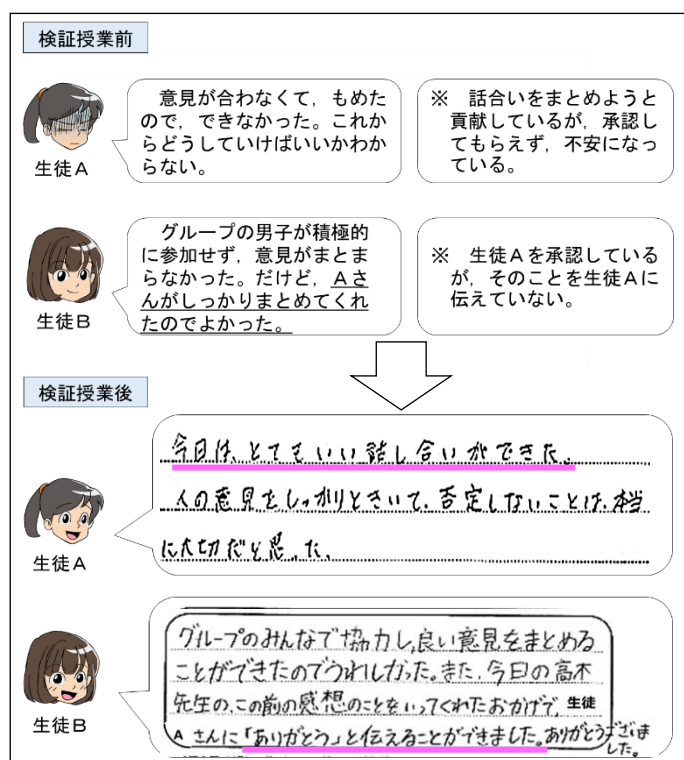


図19 検証授業前後の生徒Aと生徒Bの変容

る」と回答した生徒は、学級の約10%であった（表4）。

表4 生徒Aの「存在感の変容」

質問番号	質問項目	事前	事後
質問Ⅰ-1	わたしは、学級の人の役に立っていると思う。	3	5
質問Ⅰ-2	わたしは、学級の重要な一員だと思う。	3	5
質問Ⅰ-3	わたしは、学級の人から信頼されていると思う。	4	5

※ 「とてもあてはまる」→5, 「あてはまる」→4, 「どちらともいえない」→3
「あまりあてはまらない」→2, 「まったくあてはまらない」→1 とする。

(イ) 課題

存在感に関する「学級の人の役に立っていると思う。」に対して、「とてもあてはまる」、「あてはまる」と回答した生徒は41%から45%に、「学級の人から信頼されていると思う。」は37%から39%に増加している。しかし、「学級の重要な一員だと思う。」は47%から45%に減少している（図20）。一度の授業や学校行事で、全ての生徒を学級において重要な一員であると感じさせることは難しいためであると考える。今後は、全ての生徒に対して、学級において重要な一員であると感じさせられる活動の工夫が必要であると考える。

イ 【視点2：承認】について

(ア) 成果

全ての生徒が互いに認め合うために、舞中祭を振り返り、自分が特に努力したこと、日常の集団生活に生かせそうなことや大切だと思ったことを個人ワークシートに書かせた。

その後、他の生徒の個人ワークシートの記述を読んだり、舞中祭までの練習や準備、本番の様子を思い出させたりして、同じグループの人の個人ワークシートに「いいね！コメント」を書かせた。その際、もらってうれしいコメントを書くことが重要であることに気付かせる声掛けをすることで、生徒は互いに認め合う、肯定的なコメントを書くことができた。

生徒Cは、同じグループの生徒から「舞台班をひっぱってくれた！ありがとう！」、「やり切れたことには自信をもってね。」、「ブ

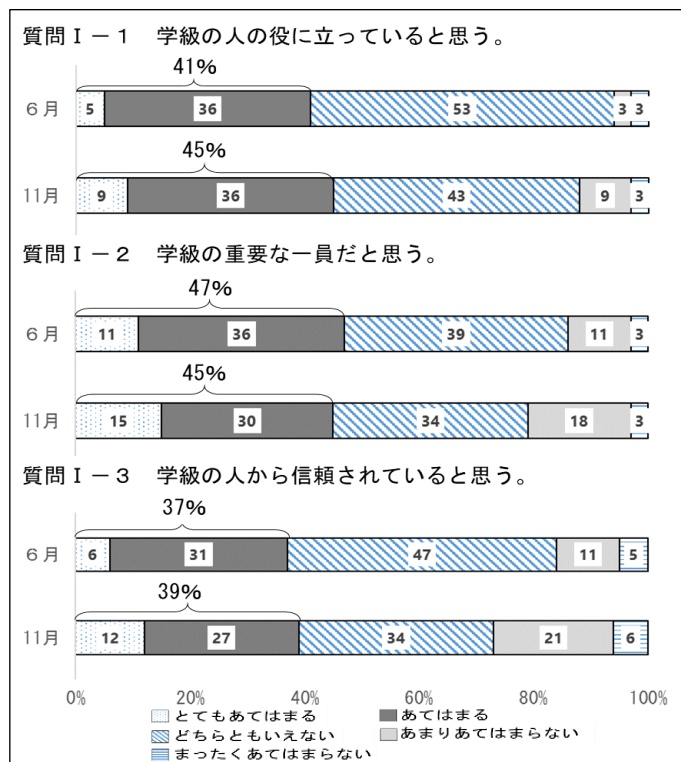


図20 存在感について



図21 生徒Cが書いてもらった「いいね！コメント」

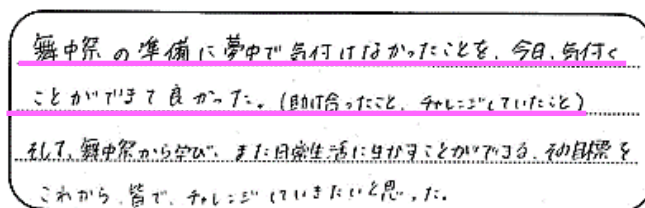


図22 生徒Cの授業の感想

口の役者っぽくてすごかった。」というコメントをもらっており、協働して取り組んだことや、最後までやり遂げたことを認める記述が見られる（図21）。生徒Cの授業の感想を見ると、「舞中祭の準備に夢中で気付かなかったことを、気付くことができて良かった。（助け合ったこと、チャレンジしていたこと）」と書いている（図22）。無意識であったことを、他の生徒からの「いいね！コメント」で気付くことができたようである。

「学級の人意見聞く態度は良いか。」と「学級の人良い部分に注目している。」という質問に対して、「よくできる」と回答した割合はどちらも増加している。相手の話をうなずきながら聴くことを意識させ、互いに「いいね！コメント」を書く活動が効果的であったと考える（図23）。

(イ) 課題

承認に関する「学級の人から『ありがとう』と言われることがある。」の質問に対して、「とてもあてはまる」、「あてはまる」と回答した生徒の割合に変化はない。また、「学級の人から褒められることがある。」の質問に対しては53%から48%になっており、承認する意識はあまり変わっていない（図24）。

相手の話をしっかり聴くことを意識付けさせるために、「舞中スタイル」を全員で音読させ、意識してほしい部分を確認させた。生徒の様子を観察すると、相手が話をするときに体を向けて聴くことはできていたが、相槌を打つやうなずくなどの行動が少なかった。

検証授業Ⅱ前後の実態調査の結果から、ほとんど変容が見られなかった（図25）。授業において、生徒に「舞中スタイル」を意識させる手立ての工夫が不十分であったと考える。今後は、授業だけでなく、学校生活のさまざまな場面で、「舞中スタイル」を意識させるような工夫が必要である。

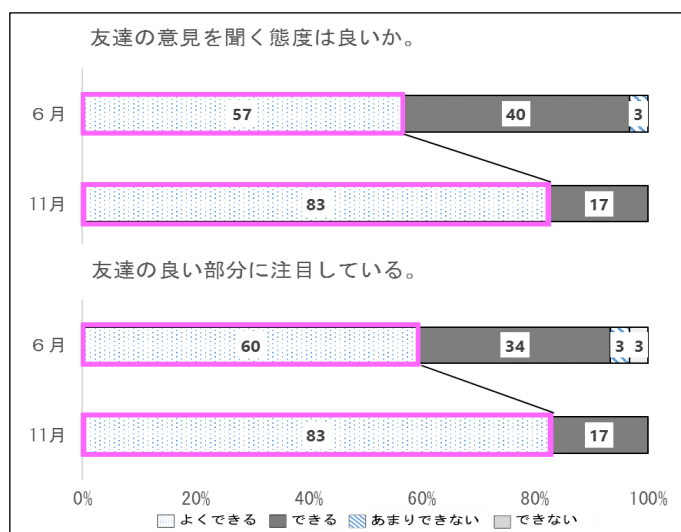


図23 検証授業Ⅱ前後の自己評価

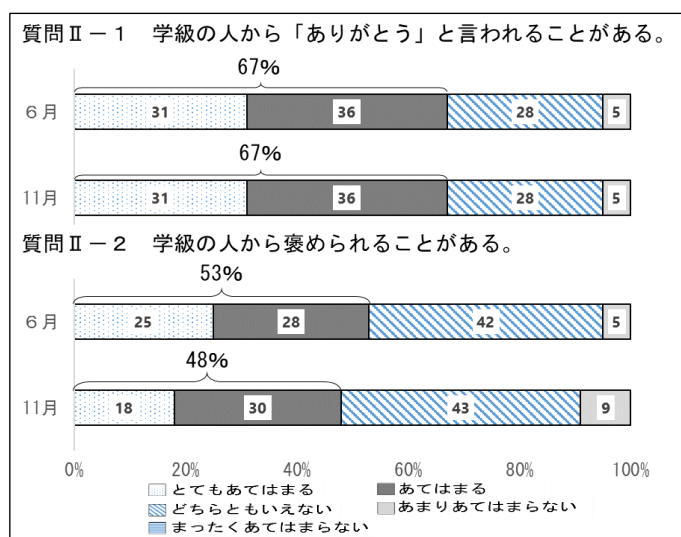


図24 承認について

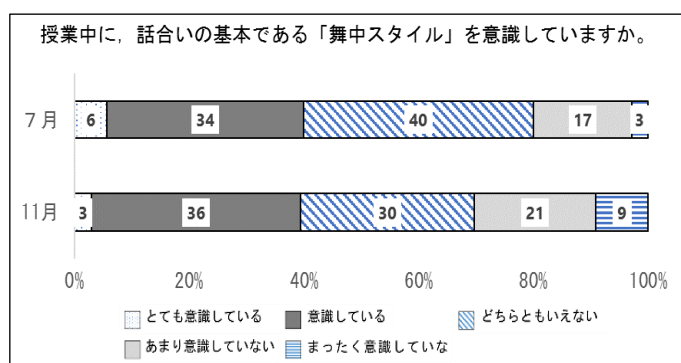


図25 「舞中スタイル」について

ウ 【視点3：貢献】について

(ア) 成果

検証授業Ⅰでは、役割分担を細かく指示せず、生徒に任せたが、一人の生徒が何役も行い、役割を果たしていない生徒が見られた。そこで、生徒に配布した個人ワークシートの裏面に、話し合いのルールを掲載した。司会者になった生徒が話し合いを進め、必ず全員に発表させることにより、多くの生徒が集団の一員としての自覚をもち、話し合いに参加し、貢献しようとする様子が見られた。

自分の意見を個人ワークシートに記入後、付箋紙に転記させ、付箋紙をグループ活動シートに貼らせながら自分の意見を発表させ、話し合いを進めさせた。生徒が活用したグループ活動シート（図26）から、「帰りの会で専門部のグループになり一日の反省をする。」や「授業中の話し合いのときなどに、相手の意見を否定しないで、最後まで話を聞く。」など、今後、取り組むべき常時活動について、合意形成を図ることができた。

個人が考えた意見をグループ内で発表することで、集団に対して貢献するという意識が高まったと考える。

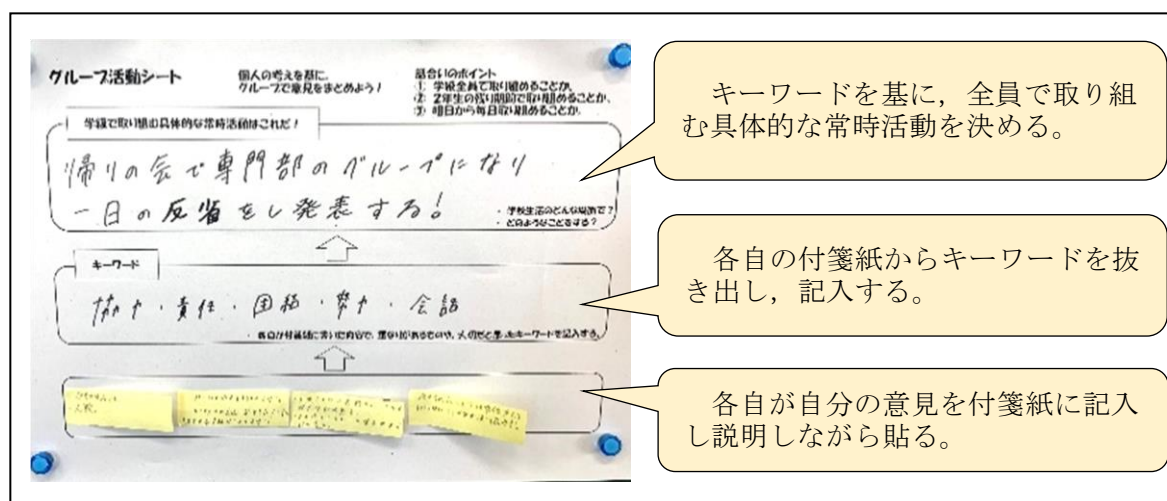


図26 グループ活動シート

貢献に関する「学級の人が納得する意見を言うことがある。」という質問に対して、「とてもあてはまる」、「あてはまる」と回答した生徒の割合は、36%から45%に増加している（図27）。全ての生徒に自分の意見を発表させる場面を設定することで、「学級の人を納得させるような意見を言うことがある。」と回答した生徒の割合が増加したと考える。

(イ) 課題

貢献に関する「学級の人を手伝いをすることがある。」という質問に対して、「とてもあてはまる」、「あてはまる」と回答した生徒の割合に変化は見られない（図27）。今回の活動は、自分の役割を果たすことに精一杯で、学級の人を手伝うことができなかったと考える。

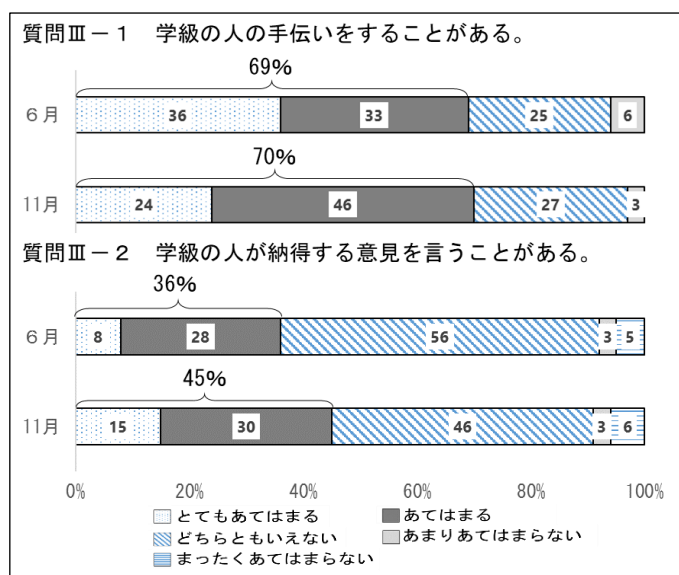


図27 貢献について

(6) 生徒の学校回避感情の変容

検証授業Ⅱ前後の生徒の学校回避感情を比較すると、学校回避感情が「少しある」、「よくある」と回答した生徒の割合は、39%から27%に12ポイント減少した。一方で、「全くない」、「あまりない」と回答した生徒の割合に変容はなかった。また、「どちらともいえない」と回答した生徒は増加している（図28）。

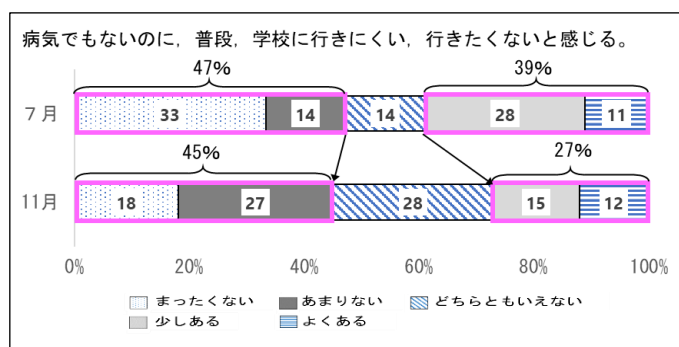


図28 検証授業Ⅱ前後の生徒の学校回避感情の比較

この結果から、不登校の未然防止の方法として、授業や学校行事等の工夫や改善による全体指導により、学校回避感情が高い生徒を減少させることにつながったのではないかと考える。

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) 話し合い活動の工夫やワークシートの工夫を行い、相手を認め、伝え合う場面を設定することにより、生徒同士が三つの「いいね！」を意識して、認め合い、伝え合う姿が見られた。自己有用感の中心的な構成要素である存在感の高まりが見られたと考える。
- (2) 互いに「いいね！コメント」を書く場面を設定することにより、友達の良い部分に注目していると回答した生徒の割合が増加した。他者を承認する意識を高めることができたと考える。
- (3) 個人ワークシートに自分の意見を書かせ、グループ活動シートを活用して話し合いを進めさせることにより、グループ内で全ての生徒に自分の意見を発表させることができた。集団に対して貢献する意識を高めることができたと考える。
- (4) 不登校の未然防止を目指した取組として、全ての生徒に対して、自己有用感を高める活動の工夫を行うことにより、学校回避感情が「少しある」、「よくある」と回答した生徒は減少した。

2 今後の課題

- (1) 実態調査の結果から、「学級の人を信頼している。」と感じているが、「学級の人から信頼されていると思う。」と感じている生徒は少ないことが明らかとなった。今後は、集団や他者に対して貢献することが信頼につながることを感じさせられる取組を実践する必要がある。
- (2) 学校回避感情について、「全くない」、「あまりない」と回答する生徒の割合に変化がなかった。今後は、本研究で作成した年間指導計画を基に、自己有用感を高める三つの「いいね！」の実践活動を繰り返し、具体的な手立ての改善を行い、今後も研究を継続する必要がある。

〈引用文献〉

- | | | | |
|------|----------------------|---|------------|
| * 1) | 文部科学省 | 『第3期教育振興基本計画』 | 平成30年 |
| * 2) | 尾木和英・有村久春・
嶋崎政男 著 | 『図でわかりやすく解説 生徒指導提
要を理解する実践する』 | 2011年 学事出版 |
| * 3) | 鹿児島県教育委員会 | 『平成30年度児童生徒の問題行動・不登校
等生徒指導上の諸課題に関する調査結果
(鹿児島県公立学校)』 | 令和元年 |
| * 5) | 国立教育政策研究所 | 『生徒指導リーフLeaf. 22 不登校の数を
「継続数」と「新規数」とで考える』 | 平成30年 |
| * 6) | 栃木県総合教育
センター | 『高めよう！自己有用感』 | 平成25年 |

〈参考文献〉

- | | | | | |
|---|-------------------------------|---|-------|---------|
| ○ | 文部科学省 | 『中学校学習指導要領解説 特別活動編』 | 平成29年 | 東洋館出版社 |
| ○ | 文部科学省 | 『生徒指導提要』 | 平成22年 | 教育図書 |
| ○ | 文部科学省 | 『不登校児童生徒への支援の在り方につい
て』 | 平成28年 | |
| ○ | 国立教育政策研究所 | 『生徒指導リーフLeaf. 18 「自尊感情」？そ
れとも「自己有用感」？』 | 平成27年 | |
| ○ | 国立教育政策研究所 | 『生徒指導リーフLeaf. 14 不登校の予防』 | 平成26年 | |
| ○ | 国立教育政策研究所 | 『生徒指導リーフLeaf. 2 「絆づくり」と「居
場所づくり」』 | 平成24年 | |
| ○ | 城戸茂・島田光美・
美谷島正義・三好仁司
編著 | 『中学校教育課程実践講座 特別活動』 | 2018年 | ぎょうせい |
| ○ | 中村豊 編著 | 『「生徒指導提要」の現在を確認する理解す
る』 | 2019年 | 学事出版 |
| ○ | 小野昌彦 著 | 『不登校問題で困ったときに開く本』 | 平成24年 | 教育開発研究所 |
| ○ | 小林正幸・大熊雅士
編著 | 『不登校にしない先生・登校を支援できる先
生』 | 2009年 | 明治図書 |
| ○ | 國分康孝・國分久子
総編集 | 『構成的グループエンカウンター辞典』 | 2004年 | 図書文化 |
| ○ | 北島貞一 著 | 『自己有用感 ー生きる力の中核ー』 | 1999年 | 田研出版 |

長期研修者 [高木 秀和]

担当所員 [小吉 成興]

【研究の概要】

本研究は、不登校の未然防止を目指し、生徒の自己有用感を高める三つの「いいね！」の活動の工夫について研究したものである。

具体的には、まず、本研究で目指す生徒の姿や授業の在り方を明確にした。次に、自己有用感の三要素である存在感、承認、貢献を高めるための手立てとして、年間指導計画の作成や授業における話し合い活動の工夫、ワークシートの工夫を行った。学級活動において、話し合い、認め合い、役割を果たすための場面を設定し、自分の意見を発表し、互いの意見を認め合う活動を行った。さらに、自己有用感の中心要素である存在感を高めるために、認めていることを互いに伝え合う活動を行った。

このような活動を通して、生徒は合意形成した具体的な行動目標や常時活動を、自主的に実践することができるようになった。

その結果、自己有用感の中心的な構成要素である存在感を高めることにつながり、「普段、学校に行きにくい、または行きたくない。」と感じる学校回避感情が低下し、不登校の未然防止につながれたと考える。

【担当所員の所見】

本県においては、不登校状態にある児童生徒への支援に加え、新規不登校児童生徒への対応も喫緊の課題である。

このような本県の状況を踏まえ、高木教諭は、自己有用感を高めることにより学校回避感情を低下させ、不登校の未然防止につなげる研究に取り組んだ。

具体的には、学級活動において自己有用感の構成要素である存在感・承認・貢献を高める場면을効果的に設定し、さらに、話し合い活動の工夫やワークシートの工夫を行った。このことにより、三つの「いいね！」を意識して積極的に認め合い、伝え合う生徒の姿が見られ、本研究の有効性を確認することができた。

本研究は、教育活動の様々な場面において、その活用と成果が期待される。今後も本研究の取組を継続していくとともに、更なる研鑽に努めてほしい。